

や頭に板片で夥しい傷を受けながら、その兩腕に確りと抱いた二才ほどの坊やには掠傷一つ負はせてゐない。子供は母親の乳房を弄つた儘安心しきつて死んでゐる。何と残酷な姿であらうか、思はず涙せずにはゐられなかつた。

着いた翌日からは毎日朝早く宿を出て慰靈堂へ御詣りし、有川棧橋へ行つて兄の來るのを待つ、然し解から上つて來る人々は皆生きてはゐない、運ばれる遺体を一人々々首實驗して搜し求めてゐると、やがて日暮れも近くなる「今日も、見つからなかつたか！」と一人眩き乍ら宿へ歸る。然し寢るに寢られず一夜を明かした夜も幾晩かあつた。斯うした不安な日が幾日か續いた或日の午后、兄の遺品が上つて來た。それを片付けてゐる間に遺体も上つた。然しその變り果てた姿を、又その時の私の氣持を、私は言ひ現す言葉を知らない。それは遭難の日から丁度十日目に當る十一月六日であつた。その夜は七重濱職員養成所に安置し通夜した。七日には茶毘に付し、八日に離道して九日の正午歸横した。その間沿道の各主要驛では慰靈の御焼香を賜り横須賀驛頭には數百名の御出迎へを受けて午後一時自坊に安着致しました。その後葬儀も無事終了致しました事は皆様方からの御力添の賜物であり深く感謝し本人の遺族を代表して茲に厚く御禮申上げます。(遠州可睡齋僧坊にて弟信晃九拜)

駒澤大学に於ける桑山君

駒澤大學總長 衛藤 即 應

桑山良晃君は萬藏寺に生を享け、幼き頃より曹洞宗の法を嗣ぐべき者として育くまれて來ました。而して我が駒澤大学に入學されるや熟慮の結果進んで、中世曹洞宗を歴史學的に攻究する道を一生の

課題として選だのであります。宗門にとつて、かゝる立場の研究は云うまでもなく大事でありまして、宗門學徒こそが、その眞髓を把握し得るものであると考へます。桑山君はよくこの重大性を辨へ在學中に、兎に角一應の試論を出されてその価値を問はれた。その努力と勇氣とは買はれるべきであります。もとよりこの研究は幾多の星霜を重ねるべき問題でありまして、右の試論は桑山君にとつてはほんの出発点でありましたでしょう。果して、桑山君はこの間に苦澁を味はつた科學研究と宗學との問題に相遇し、煩悶を重ねられ、僧侶としての烈しい試練を求められたに違ひない。その證左は卒業後の同君の行動した處に表はれてゐる。實地の修行を重ね宗門の精神を理解し、宗旨の內面的把握を第一とせねばならぬとして、或は越山に或は可睡齋に登つたのです。かうした基礎觀念の下に斯學の展開を期されたのであります。

斯様な末たのもしい學徒を一朝にして、渡島の藻屑として、失うとは、洵に痛惜に堪へません。大學としても、宗門としても悲しまずにゐられません。

學行共々に自らを鍛へ眞理を究めんと努力された桑山君の爲に、謹しんで敬意を表するものであります。

心香をささぐ

駒澤大學學監 山田 靈林

桑山君。私は君の全生涯を通觀して、しみじみ思わしめられる。君は曹洞宗の僧侶であるということに、深い感激を抱いていたといふことを。

修學課程を見ても藏書目錄を見ても友人名簿を見ても、殊に遺愛

の行脚姿の写眞を見ても、それを感じせしめられる。

窮みなき法悦にうるんでいる瞳、ほほの輝き、何れからともなく感ぜしめられる清純さ、健かさ、美しさ私は君を思うとき、それが險にくつきり浮ぶ。

私は禮仰しつつ、心香をささげている。

桑山君の姿に憶ふ

文學部長・教授 岩井大慧

二十八年の春、私は法事があつて函館に渡りました。ところがどういふ廻り合せか、往きも復りも洞爺丸に乗つたのでした。それで今度の惨事が傳へられると、何といふことなしに、異状な關心をもち「あの船がね！」と吃驚すると同時に、何とも言へぬいやな氣持がしました。その一方船そのものについて言ひ知れぬ愛惜の念が起り、そして誰も知人の乗つてゐないことを祈つたのでした。ところが事もあらうに、その遭難者中に、その二十八年の卒業生で、而も私ども史學科生だつた桑山君が、颱風の犠牲となつてゐたと聞いて、再び呆然として了ひました。何といふ悪い廻り合せであつたのでせう。靜かに眼をつむつて冥福を祈ると、私の腦裡に洞爺丸のあちこちの場所が浮び、そしてそこに桑山君の青く剃つた頭の姿が現はれて來ました。私はここに拙い一首を君の靈に捧げることになりました。

北海の渡島フシマのみなみ七飯濱ナナエ

われ泣きくれて君をしぞ憶ふ

あした來る人

文學部教授 佐藤堅司

洞爺丸の遭難者のなかに、桑山君の名を見出したとき、私の胸はつぶれた。そうして、その悲しみのためにふさがる險のなかに浮んだのは、在りし日の桑山君の面影である。駒澤大學での桑山君と私の交渉は僅かに一年間だつたが、二人は性格的にウマがあつたともいふのか、研究室や圖書館や見學旅行やいろいろの機會に、よく問答しあつたものである。桑山君は私に随分多くの質問をした。その全部をいま私は覚えてゐるわけではないが、不思議にも忘れられない問答が三つ四つある。研究室での一遍上人論と妙好人論、圖書館の一隅での傳授に關する問答、鎌倉での神社建築に關する問答がそれである。

私は桑山君の性格を井上靖氏の『あした來る人』(朝日新聞掲載)と結びつけてみた。この小説は、「ウマがあうかわないか。」を主題としていたからである。その主人公は、男女四人で、いずれも好感のもてる人物なのだ。彼等は「みんな缺點はあるが、……純粹なものがある。その純粹なもののために、みんな傷ついたり回り道をしたりしている。……併し、やがて、彼等は完全な人間として、あした來るだろう。」と、作者から評されている。桑山君も、「あした來る人」の部類に屬する人だつた。然るにその桑山君は、「あした來る人」になつてしまつた。まことに悲しいことである。

函館の海に沈みてわが友はあした來まさぬ人となりけり
悲しやなこれを運命さだめといふべきかひとり身に於てゆける君はも